

『景清』の論

水原 一

軍記と、歴史と、伝説と、芸能と……、平景清（本姓は藤原）の人物像は、余りにも複雑怪奇である。私たちは何となく『平家物語』を源平正史として読み慣れているが、その中で常に平家の勇士の筆頭に挙げられるのが、上総悪七兵衛景清かづのあくしちひょうえという侍大将である。だがその武勇談といえは、屋島の浜での鍛引だけで、それも何の戦果に結びつくものでもない。壇浦の合戦の後も「逃げ上手」「生き上手」などという妙な呼称をまともして、しぶとい残党として出沒し、結局頼朝暗殺などは未遂に終わった。同じ様な執念に燃える他の残党の話も似た型が複数あり、それだけに景清の実像は曖昧に分散してしまう。史家の間には「景清とは架空の人物だ」という穿った観方もある。

しかし『山槐記』（中山忠親には確かに記されている人物である。治承四年、頼朝率兵の大軍と富士川で対陣した時、平家は既に情勢不利と見て退却策を建てた。ただ景清を急遽信濃守に任じて、頼朝よりも手強い甲斐源氏や、北信に行動を起した木曾義仲に対応させようとしたらしい。景清の父上総介忠清の推挙だから身びいきもあるうし、結局は水鳥の羽音騒ぎで全軍総退却してしまい、景清の信濃守は実現しなかった。けれども東国の難局に派遣するに足る戦略的素質をも秘めた侍大将として実在していたのである。

それにしても景清は謎の多い人物で、それ故に興味深まるのだが、能「景清」に關連して、最近考え得た二つの事だけを記しておく。

その一は、「景清」がなぜ盲人なのかという、いきさつと意味である。その二は、遠路尋ねて来て再会した娘の人丸をなぜ追いつ返してしまったのかという問題である。

* * *

平家の残党が次第にここに集まり立籠った。湯浅氏は平家の西海落ちに同行しなかったが裏切ったわけではない。当時の武士の戦力とは、領地と領民の力なのである。湯浅氏は紀州湯浅に平家の落武者を集めて、討手を悩ます事三ヶ月に及んだ。景清もこれに加わった。湯浅氏は文覚上人の大檀家であるから、頼朝も手を焼いて、結局忠房の助命を約束しておびき出し、謀殺した。景清ら残党はむなしく散り散りに姿を消した。

平知盛の遺児知忠は乳人に養われて成長した。都に潜入し、法性寺辺に隠れ住んだ。ここにも平家の残党が集まった中に景清がいた。しかし発覚して討手に囲まれ、激闘の末知忠は痛手を負って自害し、景清はそこをも逃げ延びた。二度の戦とも『平家物語』に見える。

* * *

その後景清は潜行して頼朝を狙う。同様刺客は幾人もあり、景清は刺客代表の如くに語り伝えられ、幸若舞曲や浄瑠璃の主人公となって活躍する。

能「大仏供養」は、奈良東大寺の大仏再建成って、その開眼供養に頼朝も参加した事が舞台となる。景清は好機のがさじと狙ったが、露顯し、名劍疋丸を振って警固の武者を斬って立去るのであるが、それは

建久六年三月十三日、壇浦の滅亡から十年を経ていた。『平家物語』ではこの刺客は景清ではなく、薩摩中務丞家資、または宗資、また薩摩平六家長など種々の名で伝えられている。頼朝を狙って果さず、捕えられて処刑された。頼朝の参詣、貴賤群集の賑わいという絶好の条件だから、そういう事件があつても理解できる。

『平家物語』延慶本ではまた別伝を見せている。景清は鎌倉に忍んで故意に捕われた。頼朝は警戒して常陸の八田知家に預けた。囚人とはいへ景清は傍若無人の振舞で知家を困らせていたが、大仏供養の七日前から飲食を絶ち、供養当日に餓死を遂げた、とある。考えさせられる話である。

平家盛時の最大の悪行が、東大寺の金銅十六丈の大仏を焼き滅ぼした事であった。勸進聖俊乗坊重源等の辛苦十五年を経て再建成り、大仏開眼供養が行われる。それは国家の慶事ではあつたが、不屈の闘志を抱き続ける平家の残党にとつては、果して如何なる意味を持つたであらうか。——それは平家罪業の跡を完全消去する、と同時に、有無を言わず平家の歴史の終結を宣告する厳しい終止符ではなかつたらうか。遠い東国の囚人景清の餓死が、まさに大仏供養のその目でなければならなかつた、という処に、我々は残党の平家武士の痛憤の

念を汲みたいと思う。

* * *

残党景清のまた別の伝説が、幸若・古淨瑠璃などに肥大する中で大事な点に気づいておきたい。大仏開眼供養と頼朝暗殺計画とは因縁があつた。景清は捕えられるが、頼朝は一命を助けて日向に流す。その恩情に対し、景清は復讐の怨念を絶つため、そして源氏の世を二度と見ることを拒み、自ら両眼を抉つたというのである。大仏開眼の日は彼の閉眼の日なのであり、それは残党の勇士の、挫折と、懺悔と、なお不屈の平家魂の表現なのであつた。能「景清」に既に盲人として現れる景清の、悲愁と、絶望と、頑固不敵の像は、そこに由来しているのだと推測する事ではじめて理解できるのである。複雑多様な景清伝説は、どれも本当かではなくて、混沌のままに、その奥の意味を見る事が必要なのである。

* * *

鎌倉から日向までをはるばる父を訪ねて来た娘人丸の前に、景清は昔の平家武士から、今の日向盲僧への移行をさらす。その落差を埋めるのが「語り部景清」の屋島語りなのではないか。私は近頃、語り部が語る能の世界と、能の中に溶けこんだ形の語り部の世界——という、鶏と卵式循環論に関心を深めて行こうとしている。景清を平

家物語作者とする奇説（『臥雲日件録』）などはその辺に関連するであらう。

景清はなぜ追い返す様に娘と別れてしまったのか。答は複雑だが、一言だけ洩らすなら、それが盲人の語り部の掟だからであつた。異性と同居同棲は一日たりとも許されないのであつた。逢坂の蟬丸が姉逆髪と奇しき邂逅の涙にひたりつつ、別れねばならぬのも同じである。愛情も奇縁も、肉親の絆も、その鉄則の前には無力なのであり、もしも我々が彼等の人間愛に同情して結びつけなどしたら、彼は盲人社会の刑を受け、「くすれ」「はなれ」という烙印を捺されて、放浪から破滅の道へさまよい出なければならなかつたのである。「座頭の妻」などという人並の家族形成は、多分官制度が公認された以後の事で、それでも替女などは近年姿を消す最後まで本来独身を貫くのがたてまえなのであつた。

もともと私は「能」の古い由来を追い求めてきている者である。今後私は能「景清」の舞台の上に父娘を隔てる、形なき鉄扉を思い描いて観る事になるであらう。

（駒沢大学名誉教授）